

静岡地区 事務局より

紙上発表して下さった先生方の実践についての意見・感想等

・は感想、★は伺いたいこと、教えていただきたいこと

① 吃音 静岡市立番町小学校通級指導教室（ことばの教室） 新井 忍 先生

- ・通級指導教室が在籍校では話せない吃音について、自分の思いを素直に話せる場になっていることは大切だと思った。幼児期では、自分の思いを言葉で表すことや、気持ちを共有することは難しいこともあるが、通ってくる子どもたちに「自分は自分のままでいい」「一人ではなく仲間がいる」「優しく見守ってくれる家族や先生がいる」「自分の思いを自分のことばで最後まで伝えていきたい」と思いになれるような指導を目指していきたいと思った。
- ・ことばの教室でグループ指導を受けた子どもたちが、吃音に対する悩みを軽減させていることが分かりました。人によって捉え方が違うことを少人数でじっくり学び、子どもたちが今後吃音と付き合い合っていくことだけでなく、他の学びをする上でも大切な経験をしていると思いました。
- ・深呼吸や体の脱力、二人以上での音読など、学校生活の中で吃音の「困った」に対応するヒントを得ることができました。幼言でも就学を目の前にして吃音が出たり、ひどくなったりするお子さんもいるので、「つなげる」という視点でも大変勉強になりました。
- ・学齢（特に学年が大きくなれば）では自分の思いやどう感じているか言葉にでき、自分自身のことがかかってくるのだと思いました。また、本人は「治したい」「上手に言いたい」と願う気持ちが根底にはあるのだと痛感しました。幼児でも「治す」ではなく「受容する」を大切に活動しています。通級に通っている時期が長い子どもたちは吃音というものを知り、対処しようとするのできるのだとわかりました。話し合うことで、子ども同士で気づくことがあり、また共感しあえるのだと改めて思いました。
- ・「味方がいる」という実感が子に安心できる存在になり、吃音と上手に付き合い合っていく糧になるのだと思いました。
- ・通級教室での吃音指導の取り組み方がよく分かった実践でした。分かりやすかったです。幼児の吃音指導では、小学校の通級の前段階なので、具体的に子ども自身が吃音に向き合うというよりも、周りの環境を整えていくことが主になっています。保護者さんの受け入れ体制が整っている中から小学校の通級へ上がったほうが子どもたち自身の成長になるとつくづく感じました。幼言の中でできることを日々探し、次につなげるように考えていきたいと思えます。ありがとうございました。
- ・年間指導の計画を「自分を知る」「自分を語る」「自分を発信する」というステップで捉えて実践されていたことは、発達通級でも参考になる実践だと感じました。
- ・「自分の吃に対する気持ちの変遷」のグラフを見て、言語通級に通っている意義や先生の実践の価値が伝わってきました。
- ・子どもたちにとって自分と同じ、自分と似た経験をしている仲間の存在は大きいと思えます。この経験はこの後にもきっと生きるだろうと信じたいです。その空間を丁寧に作り上げてきた先生方の気持ちが分かりました。
- ・通常学級の先生にとって、吃音のある子どもとどう向き合っているのか、分からないことが沢山だと思います。担任の先生に自分の吃音をクイズにして出題するという手立ては、自分の吃音への理解、担任の先生の理解、共に深めていくいい実践だと思いました。

・吃音の子は、その子なりに悩みをもって生活していると思います。吃音とどう向き合っていけばいいのか、保護者も含め、前向きに考えられるようになった変化は、先生の実践の成果の表れだと思います。

★自分はまだ吃音のある子どもの指導に当たったことがないため、吃音の子への指導には分からないことが多い。そのため、今回の先生の発表は吃音の子の理解の一助となった。「吃音を直したい」という思いの強い子に対して、「吃音を受け入れる」という方向へ気持ちを転換させていく指導のプロセスについて、もう少し詳しく知りたいと感じた。

・指導参観の担任とのかかわりがとても良い機会となっている。行事をそのように計画で来て適切な見通しが立っていると感じた。また、そこに向けて通級で担当と児童らがあたたかく関わっている様子がうかがえた。3年生でこれだけの思いを持っていることを多くの方に伝えたい。紙上発表になってしまい残念でしたが、他の分科会に出た方も熟読されることを願っています。

・ワークシートによって自分の吃音に関する受け止め方を客観視できる支援が良かった。

・グループ内に通級歴の異なる児童がいることによって、吃音の受け止め方のお手本となる存在がいるのがすばらしい。

・課題事例が「自分に関わることだけど自分じゃないこと」で、俯瞰したアドバイスができていてと感じた。

★吃音がある児童のゴール設定が難しいと感じた。今回で言う、A・B児の退級のタイミングやゴールはどうなっているのか知りたい。

・氷山の海面下の非常に大きな悩みを表出できるよう、綿密な計画のもとでグループ指導が行われていたことが大変勉強になりました。自分の気持ちが出せることで出現ども、吃音に対する気持ちも大幅に軽減していることを知り、来年度の指導の実践にグループ指導を活用できるようにしていきたいと思います。

・私自身、吃音に苦しむ子どもにどのように指導をしたら良いのかと悩んでいます。①「自分を知る」②「自分を語る」③「自分を発信する」の3段階は子どもの実態に沿ったとても良い構成だと思いました。とても参考になりました。

・子どもたちが自分の吃音について一様に「気にならない」と言っている、吃音の受け止め方はそれぞれに違っていったこと、だから自分自身を語る必要があることを強く感じました。自分を語るためには、語るができる関係を構築していなくてはなりません。大変良い実践をご紹介くださり、とても参考になりました。ありがとうございました。

・他の人と考え方が違うので、話し合うことが本当に大切だと感じた。

・「自分は自分」「自分ができる生き方をする」というのは、発達通級の子どもにも共通していると思います。

・「自分の吃音と向き合い、自分なりの吃音との付き合い方を学ぶ…」という言葉に感銘を受けました。小学生には小学生なりの自己との向き合い方があることを学びました。その手立てとしての「対話を通じた活動」が大変有効であったと思います。その活動を支えるベースとして温かで安心できる人的環境が不可欠です。その環境を作ってくださいっている担当の先生方ありがとうございました。

② 言語発達遅滞 浜松市立佐藤小学校 ことばの教室 松井 靖明 先生

- ・同じような困り感をもつ子であっても、その要因や原因はそれぞれであり、それに伴う支援も変わってくるため、アセスメントが重要であり、結果に基づいた適切な支援が必要だと感じた。また、検査結果のみではなく、行動観察も含めたアセスメントも本来の子どもの様子を把握するためにも重要なことだと思われる。幼児指導も現在は月2回の指導をしているが、保護者、所属園と連携をとり、情報を共有していくことも大切な支援だと考える。
 - ・よく似た困り感をもつお子さんでも、相談の様子や学校の様子と、それを補足する意味での発達検査の結果を結びつけ、アセスメントをまとめることによって、必要な支援が明確になっていくのだということが分かりました。保護者の方もアセスメントの説明を受け、お子さんの見方や関わり方に力を得ただろうと思いました。
 - ・二人の児童の様子を比較しながらまとめてあり、とても分かりやすかった。困り感の要因を探ることが、やはり大事だと感じた。
 - ・「聞く」領域でのつまずきの具体例と原因の表が、これからの指導に参考になります。ありがとうございました。
 - ・二人の児童の比較、とてもわかりやすかったです。幼児担当であるため、家族構成や生活形態、経済的なものなども重要な環境要因と考えてしまいます。学校での様子以外にも気になりました。
 - ・アセスメントばかりに気をとられず、一度最初の主訴に立ち返ることや実態と照らし合わせることが重要であることを再認識しました。苦手なことを得意なことでカバーするためにもアセスメントが大切であることがよく分かりました。
 - ・「6 まとめと今後の課題」に述べられていた、「全く同じような困り感をもつ子であっても、その要因や原因はそれぞれであり、それに伴う支援は変わってくる」「子供の実態とWISC-IVの結果が一致しないことも多い」「たくさん検査を行えばこどもの実態が詳しくわかるのではないかという気持ちに陥る」という思いにとっても共感できた。ただ「子供の実態とWISC-IVの結果が一致しない」ケースについては、一見一致していないだけかもしれない。現状、医療や他機関で検査したWISC-IVの下位検査評価は入手できないが、各指標の下位検査の内容や本人の行動特性などをイメージして、「一致しない」要因に思いを巡らせることも、在籍校での支援を考える上でもしかしたらヒントになるのかもしれないと思う。
 - ・参考資料（特別支援教育士の養成テキスト抜粋）を見て、学んだことを疎かにしている自分に気が付いた。初心にもどって、分析したり支援方法を考えたりしてきたいと思った。
 - ・一人ひとりのアセスメントという側面と、比較という側面から支援を行い、指導を振り返っているという発想を興味深く感じました。
 - ・指導をしながらアセスメント、そこをぐるぐるしているのが実際ですね。
 - ・同じ主訴の児童が2名いることで、どのようにアセスメントをしていったのかの観点が分かり、勉強になった。
 - ・限られた時間の中で効果的な指導を行うためのアセスメントであるからこそ、安易に行うのではなく、意味ある検査を厳選して行わなければならないと感じている。今回の先生の発表では、先生なりのその検査を行う理由が明確で、参考になった。
- ★成育歴が同じあわれの児童が学齢期に入り差異が生じ、その表れを丁寧にみとられていた。P6も縦で対比すると見やすかったと思う。そのアセスメントを活かした支援が効果的であったエビデンスが知りたいと思いました。

- ・アセスメント、支援・指導の見立てなど、全てがすばらしく、感動した。
- ・通級初任の先生に熟読してほしい内容だった。

★週に1度の指導時間におけるアセスメントと指導のバランスが難しいと感じている。松井先生がそのバランスをとるために気をつけてらっしゃることを伺いたい。

- ・アセスメントが指導を行う上でいかに重要な事であるかを改めて教えていただきました。「ことばが少ない、自分の思いをうまく伝えられない」という同じような表れの裏にある原因をきちんと探り、短時間で効果の上がる指導ができるようにするとともに、アセスメントの結果を保護者の方や在籍校担任とも共有し、共に支援していけるようにすることの大切さも教えていただきました。
- ・2人の様子を資料に挙げてくださったのでとても分かりやすかったです。
- ・私自身もアセスメント結果と実際の学級での様子が一致しない部分があると感じることがあります。それはなぜなのか、どうしたら児童の困り感を軽減させることができるのかを見極めるために、行動観察を積み重ねることが大切だと感じました。
- ・「環境調整が支援の要」ということを痛感しました。どういう環境調整を提案するのか、提案の際には、その子一人のためというのではなく、他の多くの子にとっても大切だという伝え方をしなくてはならないと常々感じています。
- ・時間をかけて子どもの実態を調べていて、浜松市で行っているアセスメントの細かさに驚きました。
- ・様々なアセスメントツールを活用して、児童の実態把握を行っており、そのアセスメント結果から客観的な分析をしていて、大変素晴らしいと感じた。
- ・最初は二人の児童を比較するということの必要性に疑問を感じたが、似たような困り感のある児童でも、アセスメントを行って、その結果を分析することで、困り感の原因の違いを明確にされているところがすごいなと思い、通級指導担当として見習わなければいけないところだと思った。
- ・二つの事例を比較することで、同じ困り感をもっていてもその要因が違うことが具体的に示していただいた実践だと思います。その要因を明らかにするためには、どのタイミングでどんなアセスメントをするかの適切な判断が必要となることを学びました。参考資料1, 2, 3は大変貴重な資料でした。活用させていただきます。ありがとうございました。

③ 構音 富士市立富士第一小学校 ことばの教室 佐野 卓信 先生

- ・構音の指導は専門的指導ではあるが、思うように進まないこともあり、対象児の様子によって工夫していかなければならないと思った。シールカードを使用することで、子ども自身の達成感が得られ続けて通級に通うことができることは大切だと感じた。そのためには、指導員として十分な知識をもつためにも、これからも学び続けていこうと思った。
- ・舌先の微細運動を根気強く練習するのは難しいものだと、幼児を指導していて実感しています。できないことを何度も練習する大変さは大人でも同じだと思います。発音のことだけでなく、どんなことでも出来たらシール、がんばったらシールによる応援は、子どもにとってとても嬉しいことだと思います。子どものがんばりの積み重ねが達成感につながるように、また、親子が笑顔で帰っていけるように、成功体験を積み上げていく工夫や努力をしていきたいと思いました。
- ・サ行の様々な構音指導法、勉強になりました。構音から離れて良いところを認めていくのが参考になりました。
- ・いろいろな工夫がされながらもSTやOTと連携をとりながら、その子によりよい方法を専門的に工夫されているのがわかりました。
- ・正音が出た瞬間の子どもの笑顔、親の笑顔、そして指導者の笑顔。とてもうれしい気持ちになります。褒められ認められることによって、子ども自身の達成感と自信につながっていく素晴らしさをどの子にも体感(体験)できるように、“知識を得る→実践する→振り返る→再試行”を繰り返し行うことを実践していきたいと思いました。“教室に来た親子が笑顔で帰っていけるように”を目指して指導をしていきたいと思います。
- ★ことばの遅れや落ち着きのなさがある子どもの構音指導は難しいと思いますが、達成感を得ることや成功体験を積み上げるための工夫が参考になりました。単調な構音指導を楽しくできるアイデアがほかにもあれば知りたいです。
- ・「成功体験の積み上げ」を通級で保証していくことは、言語通級でも発達通級でも大切なことだと思った。
- ・とてもベーシックな指導を丁寧に重ねておられると思いました。ことばの指導を初めて担当する方に参考になる実践でした。
- ・言語聴覚士、作業療法士と情報交換ができて連携がとれるという体制が、児童にとっても相乗効果があると感じました。さまざまな視点から児童のアセスメントができることは大切だし、とても有効だと思います。
- ・口腔機能訓練や最初の音作りなど、基本となる部分の大切さを再確認できた。学級担任との連携だけでなく、他機関との情報共有は確かに有効だと感じたため、自分も機会を見つけてやってみようと思う。
- ・市教委の言語聴覚士の訪問で、一緒に指導していただいたり、助言をいただいたりすることができる環境は、とてもうらやましい。ありがたいことだと思う。静岡市も担当の中に言語聴覚士の方もおられるので、新任者を指導していただけるよう市教委に位置付けていただきたい。また「市教委の作業療法士の指導も受けている」とある。富士市の環境はICTもそうだが、とても充実していると感じた。この実践、実情を、静岡市教委に伝えていただきたい。現場の頑張りで何とかまかなえというのは、英語、ICTと同様に無理なことだ。研修体制を整え、静岡言研の価値を再認識していただきたい。
- ・言語聴覚士の方に入ってもらい、改善を確認するシステムがすばらしい。

- ・外発的動機づけから内発的動機づけに変容させる指導法や関係づくりが素晴らしい。
- ・自分も何人かサ行音の構音指導をさせていただいていますが、舌の脱力保持ができるまでに時間がかかった子、摩擦音ができて舌を中に入れるとタ行になってしまう子、単音単音節では言えるものの文章の音読になるとタ行音になってしまう子等様々いますが、トークンを上手に活用し、達成感が感じられるような指導を目指していきたいと思います。文章カードの課題音に○印をつけ、その音に意識を向ける方法をやらせていただいたところ、意識して発音することができました。ありがとうございました。
- ・とても分かりやすく書いてくださりありがたかったです。
- ・落ち着きのない「困らせる子」と見えてしまう子は、実は見通しがもてず何をしたらいいのか分からず「困っている子」なのだという言葉が心に残りました。通級指導教室担当としてその子にどう向き合うのか、どのようにしたら「縁の下の力もち」になることができるのか、しっかりと考えていきたいと思いました。
- ・知識が即実践にならないと感じている。自分が正しく指導できているのか、立ち止まって検証しなくてはならないと感じました。
- ・口腔機能訓練の大切さを改めて感じました。
- ・成功体験の積み上げが子どもの力になっていると思います。
- ・自己課題になかなか向き合えない児童に対して、行動療法(オペラント条件づけ)のトークンエコノミー法を活用し、児童の自己成就感を高め、内発的動機づけへと転換を図る具体的な指導実践がまとめられていた優れた実践でした。この手法は子どもたちの適切な行動を増やす支援法であると同時に、私たち支援者に対して子どもたちをほめる機会を提供してくれる、子どもにとっても支援者にとっても有用な支援法の一つです。子どもたちのよい行動をたくさん伸ばし、子どもたちをたくさん認めて、子どもたちの自己肯定感を高めます。全てのカテゴリーの通級担当に多くの示唆を与えてくれる実践だと思います。ありがとうございました。

④ 発達 藤枝市立西益津小学校 発達通級指導教室わかくさ 永谷久美 先生

- ・「自分の思いを伝えることができるようになってほしい」という主訴で3年間通級に通っていたが、その間には登校や通級を渋ることもあったが、在籍学級や保護者の支えがあり続けることができたことは、大きな成長につながっていると思われた。幼児の指導の中でもすぐに成果が得られないこともあるが、同じ課題を繰り返すことも安心して取り組み、少し違った課題にも挑戦できるようになると思う。言語教室で学んだことを在籍園で汎化できるような課題も考えて生きたい。
- ・子どもの得意なことから自身をつけると表情もよくなり、他の子への応援ができるなど、心にゆとりができることがわかりました。みんなで気持ちを語ることにより、仲間への意識が強くなり、仲間の力により、お互いに高め合いながら成長していくのを感じました。
- ・小グループ指導の継続的な取り組みの中(3年という長期間)、A君の成長していく様子がよくわかりました。同じ課題を繰り返し行うことで安心して参加できるという視点は、幼児でも参考にさせていただきたいと思います。ありがとうございました。
- ・主訴、めあてや課題の意図、行う理由など、とても読みやすくわかりやすかったです。子どもの生活の場、主は在籍学級とのとらえは私も同じ考えです。学んだことを主の場所で実を結べるよう汎化していく課題も思うことが多いため、ぜひともその部分への取り組みを期待し、また聞きたいなと思いました。
- ・「ワンバウンドゴール」は番町小発達通級でも取り入れていて、今後も継承されてほしい活動だと思う。通級の世代交代や新任者を含むメンバーローテーションが加速する中、ともすると、活動ありき(極端に言えば、ゲーム性があるから楽しいから、効果があると言われていたから等)だけで継承されてしまう恐れもある。今回、永谷先生が、「ワンバウンドゴール」を取り入れた実践を、課題のねらい、活動の様子、子どもの表れを書面でまとめて下さったことは、本来、室内研で丁寧に行うべきところを、先生の実践で多くを補うことができたと感じる。ありがとうございました。
- ・同じ教材を使い指導したことがあります。いろいろな価値のある教材で、指導のバリエーションがもちやすいです。でも、自分も陥りやすい難しさも含んだ教材だと感じています。子どもが遊びに没頭しやすく、その活動から何を学ばせたいのか、学んだことを教室のどの行動に生かそうとしているのか。そこを担当者が明確にしておく必要があるといつも思っています。
- ・同じ教材を使うことで、子ども自信が自分の成長に気付き、自己肯定感を高めることにつながればとても有効だと思います。その為にも、子どもに何を意識させて活動させるのか、また、活動の勝敗が大切なのではないことをしっかりと提示することが大切だと改めて思いました。
- ★ヘルプを出す練習は自分も指導方法を模索しているが、その子の生活に活用していくことが難しい。先生はスピーチ練習の中でのヘルプの出し方を指導しており、成果が現れていたが、本児がそれをどのように在籍校での生活に生かしていったか、もう少し詳しく知りたい。
- ・グループ指導で「ワンバウンド」のシリーズの中に、タイムリーなねらい・発達課題を取り入れていく流れはとても良いと思う。ねらいがあつての活動ということを再確認した。(『東海四県言語・聴覚・発達障害児教育研究会愛知大会紀要・発表要項』飯塚教諭の実践参照とあつたが何年か記載があるとよいと思いました。)
- ・ヘルプが出せるようになることは、高学年や中学生に向けて大変重要なスキルであることを再確認した。4ページ「5年時」で「分かりません」と言えたこと、7ページ4行目で理由をつけて通級に行きたくないと考えを言えたことは、本児にとって大変重要なポイントであつたと感じる。周りの人の受け止めや価値づけによって、本児が表出しても良いと思える素晴らしい環境になっていっ

たのであろうと思う。

- ・メモの用紙が分かりやすく、スピーチを組み立てる助けとなると感じた。
- ・思ったこと（自分の気持ちを表現すること）を書くというのは難しいことなので、自分たちは、始めは発達段階に応じた感情語彙をカードでしめし、その中から子どもたちが自分の気持ちを選ぶようにした。始めは「楽しい」「おもしろい」のみだった子が「残念」「わくわくする」「平気」などの言葉でゲームやチャレンジをやっている時の気持ちを選べるようになってきた。すこしずつ発達段階相応の感情語彙の理解が進んできている。
- ・やることを固定することで、じっくりと子どもの成長と課題の改善（克服）を見届けられる良さを感じた。
- ・変化を苦手とし、新しいことに慣れるまでに時間がかかる本児にじっくりと対応された様子がよく分かりました。
- ・3年間の成長を見届けることができるのは、通級ならではの感じ、その喜びと責任の重さを再認識しました。
- ・転出後も通級指導教室で学んだことを自信にして新たな場に対応できていることを願います。
- ・スモールステップで進んでいるのがとてもいいと思いました。グループ指導の参考になりました。
- ・振り返りの大切さを感じました。
- ・「毎年同じ課題を繰り返し行う。」ことで子どもの質的な変化が分かるという所が参考になりました。
- ・主訴に対して、同じ課題で3年間継続して指導していくことで、より効果が出たんだなと思った。また、求めるものを少しずつ高めていくことで、さらにその効果が得られたように感じた。児童の成長の変容も見て取れた。
- ・3年間の児童のグループ活動の中での、スピーチや運動課題（ワンバウンドゴール）の活動を通じた児童の行動変容の様子が具体的に示されていて、生き生きと児童の活動の様子が目に浮かぶようでした。紙面の中に通級で学んだことが、児童の転校した新しい学校で生かせず人間関係構築で苦勞しているという内容がありました。また、発表者から通級で学んだことを汎化することが課題であるとありました。もちろん、その視点は不可欠だと考えますが、その児童への個人因子のアプローチだけでなく、その児童の置かれた環境因子に対しても働きかけることが大切だと考えます。全てのカテゴリーの通級指導に言えることですが、今一度ICFモデル(生活機能分類)に根ざした、指導を考えることが大切な視点であると気づかせてくれた優れた実践でした。ありがとうございました。
- ・改めて、グループ活動の大切さについて考えさせられました。「含まれるねらい」のところに示してくださったものを参考に、生徒一人ひとりにどのような目標設定をしていくかきちんとプランをもって授業を組んでいくことが重要だと実感しました。
- ・グループ活動を通して、生徒が示す行動によって互いの手本となり、個別の指導では得られないことが多く、重要だと感じました。また、学年に適したテーマと系統性もとても大切だと感じました。
- ・グループ指導では、他者との交流の中で自身の成長を感じられるような活動を取り入れることに大きな価値があると改めて考えました。もしかしたら通級に通う子たちは、学級の中では仲間認められるという経験が少ないかもしれません。それを実現するのが通級でのグループ指導です。本校のグループ指導でも、「楽しい」だけでなく、生徒自身が成長を感じられるような活動にしていかなければと思いました。

【共通・全体の感想・意見】

- ・今回ベテランの先生方の発表が多く（②～④）とても勉強になりました。CD でいただいたことで、全ての内容を知ることができ、集まらないことのデメリットもあるけど、このやり方の良さも感じました。また、今回の CD がプレゼン資料でなく論文形式だったので、詳しいところまで伝わりました。PowerPoint と一長一短ですが、PowerPoint だったらコメントをノートに入れてあるとよいかと感じました。この充実した内容であれば、分科会でなくワークショップで大勢で共有するのもよいかと思いました。
- ・前回の資料は、プレゼンだけのものがあつたが、担当者研修会等も含めて、プレゼンではない、このようなまとめが、紙上発表では、必要だと思う（当日もちろん）。というか、この思いやまとめがあつてのプレゼンと考える。むしろプレゼンは視覚支援の資料だけでよい。どの方も非常に思いや変化が伝わりやすくまとめてあり、とても参考になった。
- ・このまとめは、会員で共有するのか。いつもの事後アンケートのように共有していただきたい。それを読んで、さらに深まると思います。